

大学における多文化体験学習実践に関する考察 —教員養成の観点から—

A Study of Multicultural Experiential Learning in Higher Education : From a Viewpoint of Teacher Training

韓 在熙

要旨

本稿は、今日の文化多様性時代に対応できる教員や保育者の資質及び能力を育成するために、国外での多文化体験学習の実践を試み、考察したものである。本保育科では、2018年に多文化保育における保育者の専門性の育成を目的として「多文化保育論」が開講された。その授業の中で、学生が異文化を理解し、自国の文化を伝える活動を通して自文化の大切さに気づき、さらに異なる文化を持つ人への認識や多様な視点を持つことができるよう、韓国での体験活動を行った。学習の導入・展開・評価の過程の中で、学生が主体的に計画・準備・まとめ活動を行うことを重視し、また、その学習成果を可視化できるようにするにはどのような内容をすれば良いか、また、どのように評価すれば良いかの問題意識をもって本活動に取り組んだ。そのため、活動プログラムの計画及び実施において、学生の主体性を重視し、また日韓学生による協働的活動を通して、より多様性を学び合える体験ができるように臨んだ。

その結果、学生自らが設定した課題を達成することによる学びがあったなど、活動のレポートからは学生の成長の様子が多く見られた。また、学習前後に実施した「異文化理解認識調査」及び「多文化コンピテンス尺度調査」では肯定的認識変化が見られた。しかし、調査項目において、学びの可視化できるより適切な内容の検討が必要であることが分かった。今後の課題としては、学習成果の適切な可視化の手法の考察及びより安全を確保した上での多様な体験活動プログラムの模索が必要であることが明らかになった。

キーワード：国外体験活動、多文化学習活動、保育者養成、異文化理解、認識調査

1. はじめに

今日のグローバル化が進む中、日本における外国人人口は2017年現在、約127万人で、総人口の約1.8%を占めている。2018年の出入国管理及び難民認定法における外国人の受け入れに関する改訂により、今はさらに文化多様性の時代を迎えることが予想される。このような背景の中、今日の学校教育現場、特に多くの大学では、国際教育プログラムなどの体験学習による人材育成においても、ビジネス的な視点での人材育成と、地球市民としての倫理教育の二つのベクトルの視点から「グローバル人材」の養成を目指している。

特に大学では、海外の留学生を受け入れて交流する異文化体験活動と、在学中の海外留学及

び国際ボランティアを促進する等、学生の海外での活動が行われるようになってきている¹⁾。

このような時代の流れの中で、将来、社会を担う子どもたちにグローバル視点を持たせることは、現在の学校教育の課題であると考えられる。したがって、教員養成及び保育者養成においては、グローバルな視点を持つ人を育てることができ資質や能力の育成が必要とされている。そのために、教員や保育者を目指す学生たちが海外及び国内における異文化体験ができる多様な可能性を考えなければならない。このような趣旨のもと、本保育科では、2018年に開講された「多文化保育」授業を通して、幼稚園教員や保育者のグローバルな資質・能力を育成することを目的として、日韓学生の多文化体験活動を行い、異なる文化への理解及び尊重、多様性を学び合う活動を試みた。

つまり、本学習は、学生が将来の保育者として、平等と共生の精神を持ち、さらに人間としての尊厳のもとに人種、民族、社会等の社会問題に取り組むことのできる地球市民としての資質や、生涯にわたる学習の初期段階にある幼児教育の場で民主的な教育を行うことのできる専門性を育成するという観点から行ったものである。

本論では、「多文化保育論」を通して行った多文化体験学習の実践を報告すると共に学習を振り返って分析することで、今後の保育者養成大学における多文化体験学習プログラムの在り方を模索し、そのデザインの可能性について考察したい。

2. 多文化体験活動企画の背景

本活動のはじまりは、筆者と新丘（シング）大学の教員（崔明熙）の研究交流を背景に、2015年に新丘大学保育科学生4人が本学を訪問し、学生交流をしたのが契機であった。同年8月4日から5日の2日間、韓国の学生らは、「自分の専門分野を深めるための海外視察を企画しよう」というシング大学の「グローバルチャレンジ」プロジェクトの支援を受けて、本学を訪問した。本学からは、保育科教員4名と学生の参加希望者8名が参加し、大学で学生交流会及び大学内の講義室やピアノ室等の学習環境の施設見学を行った。翌日の5日には、保育施設の「宮前つばさ認定こども園」と、地域子育て支援施設「柏原市つどいの広場ほっとステーション」を本学教員と学生が同行して訪問し、日本の地域子育て支援の実際を見学した。本活動に参加した学生は感想で、「日韓の互いの保育を知ることはもちろん、両国の保育文化の特徴について比較の観点から知見を得るとともに、保育の在り方について考えることができた」と述べている。

そして、2回目の交流は、2017年9月27日のスカイプ映像を通しての学生交流である。本活動の企画は、保育科の学生が保育実習で経験した、保育現場の外国籍の子どもたちへの多文化保育に関する関心から企画されたものである。保育現場における外国籍の在園児の現況については、保育実習後のアンケートの結果、75か所の保育園のうち、15か所（20%）に外国籍の子どもたちが在園していることがわかり、特に学生は保育者の子どもたちへのかかわりにおいては特別な配慮が必要とされることが課題だと気づいたのである。そこで、学生たちは、将来の保育者として、他国の文化を学びたいという問題意識を持ってこの交流が行われた。この活動は、保育科の学生7名と韓国新丘大学学生6名が参加したが、活動計画において、本学の学生が活動案を提案し、韓国の新丘大学学生と意見交換を行い決めた。本交流活動のため、7月

24日から活動当日の9月25日まで、日韓の学生は各自の活動の準備をし、交流活動に臨んだ。活動内容では、相互の言葉での挨拶と自己紹介や手遊び・絵本・遊具等の互いの保育文化を紹介・触れ合う参加型の活動を行った。

さらに、本活動の終了後、参加した学生たちは相互に感想を交わしながら、本活動を通して気づいたこと、感じたこと、学んだことなどを共有した。その一部を紹介すると以下のとおりである。

- ・手遊び体験は日韓の保育文化を互いに理解でき、異なる文化の中にも共通点を見つけることができた。絵本の読み聞かせは子ども達が同じ内容の絵本を異なる言語で見て聞けるのは、外国語に興味を持てるきっかけになり異文化に気づくことができた。
- ・お互いを理解、尊重し合おうとする心、その思いを持ちながら準備をし、お互いの文化と保育を学びあったことで、言葉の壁を越えて異文化の中にも共感することができた。違う場所においても一体感を感じられ、また、実際に会って交流したい。

以上のように、本活動を通して、参加学生らは自国の文化の大切さを新たに自覚し、またそれを伝えることの大切さを感じたこと、そして言葉の壁を越えて、お互いの心や思いを交わしたことに感動を覚えている。また、本活動に参加した7名の保育科学生は、2017年12月1日のゼミコンテストに参加し、その中、本活動について、当ゼミコンテストのテーマであった「和のこころを世界へ」に照らし合わせ、自国の文化を伝えるだけではなく、他国の文化を理解し、互いに尊重し合う心の意義としてまとめて発表した。

3. 多文化体験活動計画と準備

(1) 活動の目的

2018年夏学期の「多文化保育論」科目の開講により、当科目を通して、筆者は科目担当者として日韓の学生の多文化体験活動を計画することにした。本活動を通して、学生は異文化を理解するとともに、また自国の文化を伝える活動を通して、自文化の大切さに気づいたり、さらに異なる文化を持つ人への認識や多様な視点を持つ保育者として、または地域社会の子育て支援の役割を担う者として、社会に貢献できることを目的としている。具体的に、①日韓の保育者養成大学の学生が互いの大学を訪問・見学することを通して日韓の保育者養成の学習状況や教育プログラムの実際を学び合う。②日韓の保育科学生同士が相互の伝統文化及び保育文化を理解・体験することを通して多様な保育方法の知識を学び共有する。③日韓相互の保育現場(幼稚園及び保育施設)を見学及び触れ合う活動を通して、多様な保育文化を学び合うことを目的とした。

(2) 活動の計画と準備

「多文化保育論」科目について、授業の趣旨及びシラバスの紹介と履修条件について学期オリエンテーション時に説明した。本科目の履修にあたっては、先ず本学習に意欲をもって取り組むことを第一条件として、受講希望者の面談を行った。また、受講者の人数制限(10名)があるため、希望者が多い場合は、個人面談を通しての多文化保育に関する意欲や問題意識を持っているかどうかを優先基準にして受講者を選考した。学習計画は、学習の導入(活動の事前

学習)、展開(実際の体験活動)、まとめ(事後の振り返り・レポート作成とプレゼンテーション)の3段階で構成した。

(3) 事前学習：学習の導入及び展開

学習のはじめに、学生の「異文化間理解に関する認識調査」と「多文化間コンピテンス尺度調査」(先行研究の資料より)を行い、学生の自己認識への気づきや学習への問題意識を高めた。

また、今日における日本の多文化共生社会の現状及び多文化保育の基礎的な理論について学習し、多文化保育の必要性や保育者としての専門性について考えた。つまり、日本の多文化共生社会の背景、外国人人口の現状及び変化の推移、特に外国人子ども数の推移やその家庭環境、外国人居住者の社会的背景及び問題と課題について調べ、学生自ら考え、問題意識を持つようにした上で、多文化教育・保育の基礎的理論として、アメリカのダーマン・スパックスの多文化保育の概念やアンチバイアス教育等の基礎知識を理解する学習を行い、また、日本の教育・保育現場における実践的アプローチやその支援政策関連についても学習した。

・事前学習①は、保育現場における多文化保育実践に関する学習である。日本における多文化保育実践の現状として、言葉・食事・保護者支援等の保育現場における実践に関する基礎的知識を学習した後、実際に、八尾市の保育施設(ベトナム国籍の在園児が多い保育施設)のベトナム語通訳職員(トランティキムユンさん)を招き、実践に関する講義及び質疑応答を通して、学生の学習を深めると共に、韓国での多文化体験活動の計画に活かすための知見を得た。

・事前学習②では、韓国での多文化体験活動に関する理解を深める事前学習として、韓国の文化及び社会、韓国の幼児教育・保育制度等の保育文化に関する基礎知識について学習した。

(4) 活動の準備

新丘大学での交流活動については、主に学生が主体的に計画することを重視し、参加学生の討議や話し合いを中心に、活動内容や必要な教材の準備・作成・練習等の準備活動を行った。

活動内容は、学生自らの提案で、体験活動時期である7月の年中行事の一つである「七夕」をテーマとした活動が決まり、必要な材料の準備、手遊び教材のペープサートを作成するなど、活動内容がよく伝わるように工夫して作って練習を行った。また、学生間交流や幼稚園での子どもたちとの触れ合い活動として日本の伝統的文化と関連する手遊びや歌等を計画し、作成と練習を行った。教員は、出発前に、体験活動プログラムの活動別の記録用メモ用紙を準備し、学生自身がそれぞれの活動について自己課題を記入するようにした。また、活動中の安全についてオリエンテーションを行い、安全の確保した中で充実した体験の活動化を図った。

4. 実際の活動

(1) 本学学生の韓国における体験活動

次の<表1>は、本学の韓国における体験活動計画の概要である。

<表1> 本学学生の韓国での多文化体験活動学習活動計画の概要

項目	概 要
学習期間	2018年夏学期授業、体験活動期間（2018年7月14日～7月16日）
参加人数	・日本：IBU保育科「多文化保育論」受講生9名 ・韓国：新丘大学「児童保育」学生9名、グローバルチャレンジ学生5名
募集方法	・2018年夏学期科目「多文化保育論」受講生として保育科3 Semester学生から受講希望者を募集し、個人面接で選抜
目的	日韓の教員養成大学の学生間の交流、保育文化の交流、協働フィールドワークを通じて、多文化への理解を深め、グローバル視点をもつ人を育てることができる資質や能力を育成し、多文化教育・保育の実践力を高める
学習活動内容	① 学習前の学生の異文化理解及び多文化間コンピテンス尺度の調査 ② 多文化共生社会の現状及び多文化保育に関する基礎的知識の学習 ③ 事前学習①：日本の保育現場における多文化保育実践に関する学習 ④ 事前学習②：韓国の生活文化及び保育文化に関する基礎的知識の学習 ⑤ 韓国での多文化体験活動の計画及び準備：学生の主体的な活動 ⑥ 韓国での多文化体験活動の実施 ⑦ 多文化体験活動の振り返り、討議・個人レポート作成・プレゼンテーション ⑧ 学習後の学生の異文化理解及び多文化間コンピテンス尺度の調査

次の<表2>は、実際に行った本学学生の韓国における体験活動内容である。

<表2> 韓国での多文化体験活動スケジュール（2018年7月14-16日）

日付	活動内容	備考
7月14日 (土)	<学生の交流及び大学学内見学> ・学生間交流活動：新丘大学側からの歓迎会兼交流会、学生同士の自由歓談、歓迎のオカリナ演奏、本学学生による韓国の食べ物を取り入れた手遊びや年中行事の七夕飾りづくり ・新丘大学の見学：新丘大学の講義室やピアノ室等の学内施設見学及び新丘大学付設の植物園見学	・本学の学生9名・教員2名、新丘大学の学生14名・教員3名参加 ・活動終了後、記録メモすること
7月15日 (日)	<協働フィールドワークに基づく異文化体験活動> ：日韓の学生が2人ペア（2グループ活動）になって韓国の伝統的な生活文化である衣・食・住の文化を体験できる北村での体験活動及び地下鉄等の現代文化を体験する日韓学生の協働フィールドワーク	日韓の学生が2人ペアになって体験活動 ・活動終了後、各自記録メモすること
7月16日 (月)	<大学付設の施設（博物館、付属幼稚園、多文化家庭支援センター）の見学及び体験活動> ・大学付設博物館見学及び伝統衣装試着と礼儀作法体験 ・大学付属幼稚園の見学及び触れ合い活動 ・大学付設「多文化家庭支援センター」見学	日韓の学生協働参加 ・幼稚園の子どもたちとの触れ合い活動として日本の手遊び ・活動終了後、各自記録メモすること

(2) 新丘学生の本学における体験活動

2018年7月30日から8月1日まで3日間、韓国新丘大学のグローバルチャレンジチームの学生5人が本学を訪問し、本学の学生及び教員と様々な交流及び多文化体験活動を行った。次の<表3>は、新丘大学学生が行った本学における体験活動内容である。

<表3> 韓国新丘学生の日本での多文化体験活動

項目	概 要
活動期間	2018年7月30日～8月1日（3日間）
参加人数	・日本：IBU 保育科「多文化保育論」受講生9名他保育科教員 ・韓国：新丘大学グローバルチャレンジチーム学生5名、教員1名
目的	日韓の教員養成大学の学生間の交流、保育文化の交流、日本の保育及び地域子育て支援実践の見学を通じて、多文化への理解を深め、グローバル視点をもつ人を育てることができる資質や能力を育成し、多文化教育・保育の実践力を高める
活動内容	○7月30日 ・社会福祉法人四天王寺福祉事業団「悲田院」保育園見学及びふれあい活動 ○7月31日 ・地域子育て支援センター「ふるいち」見学及びふれあい活動 ・大学施設見学及び幼児製作授業体験、日本の伝承遊び「駒まわし」体験 ・学生交流会 ○8月1日 ・「宮前つばさ認定こども園」見学及びふれあい活動 ・花火大会参加及び流しそうめん体験

初日は、「四天王寺悲田院保育園」を訪問し、園施設の保育環境や保育の実際等を見学した後、4歳児クラスに入り、韓国の手遊び「三匹の子豚」を子どもたちと一緒にいった。韓国の保育環境や保育実践との共通点や違いを学べる有意義な活動となった。翌31日には、新丘大学の教員が同行し、「子育て支援センターふるいち」の見学やふれあい活動をし、午後には本学内の施設見学と伝承遊びを体験した後、歓迎会兼ねての学生交流会を行った。交流会には保育科教員や1回生の学生やコリア語授業の受講者も参加した。本交流会のプログラムは「多文化保育論」を受講した学生が計画し、学生が主体的に進めた。挨拶や歓談や歓迎の歌等の活動等、心を込めたプログラム内容で、日韓学生の有意義な交流の場となった。

8月1日には幼保統合施設である「宮前つばさ認定こども園」を日韓学生と一緒に訪問した。園の環境が子どもの視点で工夫されたり、保育内容や食育の実践等について学び、また触れ合い遊びとして子どもたちと一緒に楽しく韓国の手遊びをしたり、一緒に給食を食べる体験をした。8月1日の夜には、日本の伝生活文化である「流し素麺」の料理活動をして、そして夜には日本の3大花火大会といわれる「PL花火大会」を本学の運動場で鑑賞し、日本の伝統文化を体験した。

5. 事後学習（学習活動のまとめ）

本活動のまとめとして、活動後のディスカッション、各自のレポート作成、全体プレゼンテーションの実施、そして、学習はじめに行った「異文化理解認識調査」及び「多文化間コンピテンス尺度調査」を再度学習後の調査として行った。また、多文化体験活動の振り返り活動として、学生各自が活動時に記録した活動メモ紙をもとに全体討議を行い、各自の学びの気づきを共有した後、学生各自のレポートを作成し、学習の定着を図った。参加学生全員がプレゼンテーション資料を作成し、冬学期の保育科学生全員が合同で行う「保育実践演習」授業とゼミコンテストでプレゼンテーションを行い、学習成果を共有した。

学習前後に行った学生の「異文化間理解」及び「多文化間コンピテンス尺度」調査結果をもとに、学生の認識変化を分析し、多文化学習を通じた学びの可視化を試みた。

6. 学びの分析

(1) 認識調査の結果から

学生の学習前後における異文化理解に関する認識調査の結果は次の<表4>である。

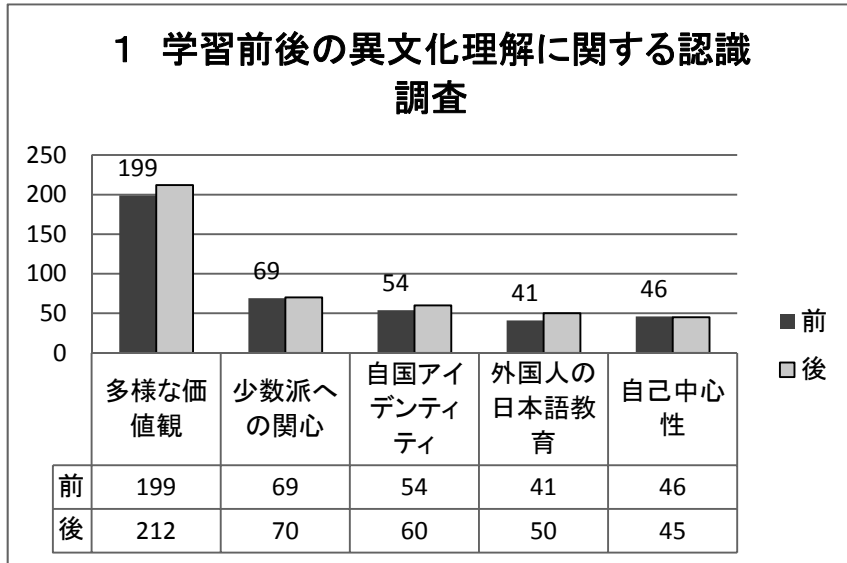
<表4>学習前後の異文化理解に関する認識調査の結果

項 目	(学習前) → (学習後)	前	後
(第1因子)「多様な価値観」			
1) いろいろなものの見方からものごとを捉えようとする	(38) → (40)	計 199	計 212
2) 多様な考え方を許容し、自由な発想を大事にする	(42) → (44)		
3) 従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方に挑戦する	(38) → (39)		
4) 相手の立場になってものを考えるようにしている	(43) → (48)		
5) 反対意見でも相手の意見を最後まで聞こうとする	(38) → (41)		
(第2因子)「少数派への関心」			
6) 沖縄米軍基地問題に関して、沖縄の人々がどう考えているのか気になる	(30) → (32)	計 69	計 70
7) 在日韓国・朝鮮人の歴史や現状を学びたい	(39) → (38)		
「保守的思想」(第3因子) ・ 自国アイデンティティ			
8) 外国人との会話の中で、自分が日本人であることによく触れる	(28) → (30)	計 54	計 60
(第4因子) ・ 外国人への日本語教育			
10) 外国人の子どもは母語教育よりも日本語教育だけを受けるべきだと思う	(18) → (20)	計 41	計 50
11) 日本で生活する外国人は全員日本語を学ぶべきだと思う	(23) → (30)		
(第5因子)「自己中心性」			
12) 他人のことを深く理解したいとは思わない	(23) → (25)	計 46	計 45
13) 迷った時に他人の意見に頼らず、自分ひとりの判断でことを決めた方が良いと思う	(23) → (20)		

注) 各項目に対して、自分の考えや態度に当てはまる番号に○を一つ選んで回答したものを合算した。

「1:まったくそうは思わない、 2:ほとんどそうは思わない、 3:どちらかというと思わない、 4:少しそう思う、 5:かなりそう思う、 6:非常にそう思う」本調査項目は、沼田潤 (2010)「日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査」『評論・社会科学』91号 PP184 - 185より筆者が任意の選定・抜粋・再分類をして使用している。

<図 1> 学習前後における異文化理解に関する認識調査結果



上記の<表 4>と<図 1>の異文化理解に関する学習前と学習後の調査結果の比較からも見られるように、第1因子の「多様な価値観」は全体項目において認識の肯定的変化が見られた。特に5項目の中の「4 相手の立場になってものを考えるようにしている」項目は大幅増加しており、他人への理解、即ち自分と異なる文化を持つ相手の文化の立場から考えようとする肯定的な結果となっていることがわかる。第2因子の「少数派への関心」の項目は、マイノリティへの関心度を表すものとして、関心度が高くなっている。第3因子の「保守的思想」の自国アイデンティティでは、自文化への自覚が向上したことがわかる。このことから今回の活動経験で学生自身の自文化に気づき、認識が高くなったといえる。特に、項目10と11の外国人への日本語教育に関する関心が増加していることが注目される。第5因子の「他人に対する関心と自己中心性」は少し低くなっているが、この項目の「他人のことに深くかかわること」は、日本文化の側面から「迷惑」として捉える可能性があり、また「他人への関心」としての「配慮」として捉える可能性もあるのではないかと考える。このような「迷惑と配慮」という概念に関連する調査内容は考察すべき課題として、今後の調査では、「なぜそう思うのか」といった概説欄を設けて行いたいと考える。次の<表 5>は学習前後の多文化コンピテンス尺度調査結果である。

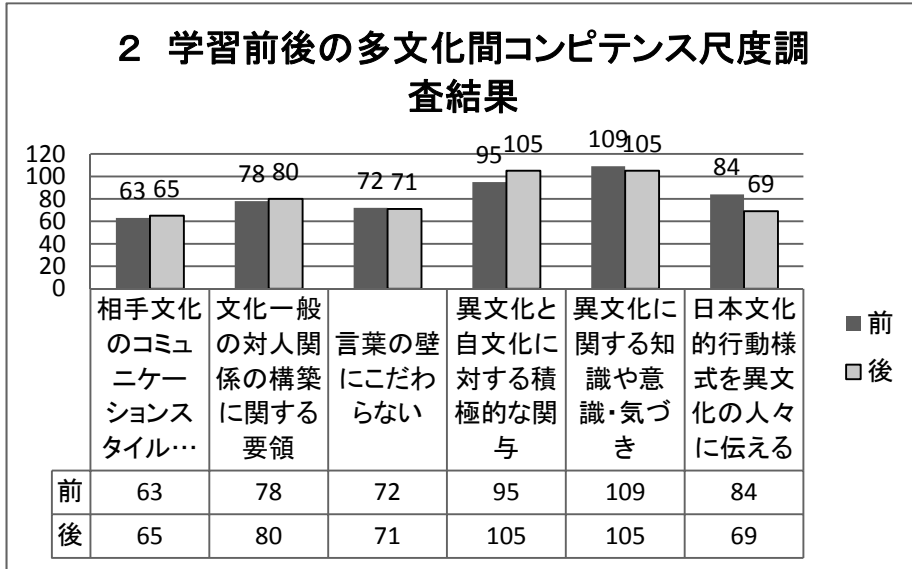
<表5>学習前後の多文化間コンピテンス尺度調査結果

項 目	(学習前) → (学習後)	前	後
(第1因子)「相手文化のコミュニケーションスタイルに合わせる」			
1) 外国人には、自分の気持ちを気後れせずに堂々と伝えることを心掛ける	(31) → (32)	計 63	計 65
2) 外国人と話すときは、遠慮しないで応じる	(32) → (33)		
(第2因子)「文化一般の対人関係の構築に関する要領」			
3) 相手の話を進んで聞きたい気持ちを表す	32 (38) → (40)	計 78	計 80
4) 積極的な気持ちが伝わるように努力する	(40) → (40)		
(第3因子)「言葉の壁にこだわらない」			
5) かたことの言葉でもねばり強くコミュニケーションする	(38) → (39)	計 72	計 71
6) 伝えたいことを工夫しながら、伝えようとする気持ちで相手に言う	(34) → (32)		
(第4因子)「異文化と自文化に対する積極的な関与」			
7) 外国人同士の仲間やグループに対して親しく話しかける	(27) → (31)	計	計
8) 相手の国の文化や習慣、人間関係のマナーについての知識を積極的に得る	(36) → (37)	95	105
9) 日本社会の習慣やマナーなど、日常的なことから日本の文化について話す	(32) → (37)		
(第5因子)「異文化に関する知識や意識・気づき」			
10) 日本の文化を再確認するために、相手の文化や習慣について積極的に知識を得ようとする	(34) → (34)	計 109	計 105
11) 簡単なことでも言葉が通じないもどかしさをわかっている	(39) → (37)		
12) 日常生活に困っていたら役立つ情報を一緒に探す	(36) → (34)		
(第6因子)「日本文化的行動様式を異文化の人々に伝える」			
13) 「謙遜」した方が好意的に受け入れられる場合があることをアドバイスする	(26) → (23)	計 84	計 69
14) 断るときは相手を傷つけないように、はっきりと言わない方がよい場合があることを教える	(28) → (22)		
15) 「遠慮」することは、相手への思いやりや配慮であることを教える	(30) → (24)		

注) 各項目に対して、自分の考えや態度に当てはまる番号に○を一つ選んで回答したものを合算した。

「1:まったく当てはまらない、 2:あまり当てはまらない、3:どちらでもない、4:やや当てはまる、5:非常に当てはまる」本調査項目は、稲垣亮子(2012)「多文化間コンピテンス尺度調査」愛知淑徳大学言語文化コミュニケーション学会 紀要『言語文化』第21号 PP18-32より筆者が任意の選定・抜粋・再分類をして使用している。

<図2> 学習前後の多文化コンピテンス尺度調査結果



学習前後の多文化間コンピテンス尺度調査結果は、上記の<表5>と<図2>のように、第1因子の「相手文化のコミュニケーションスタイルに合わせる」、第2因子の「文化一般の対人関係の構築に関する要領」、第4因子の「異文化と自文化に対する積極的な関与」に関する認識は肯定的変化が見られた。しかし、第3因子の「言葉の壁にこだわらない」、第5因子の「異文化に関する知識や意識・気づき」の内容においては、少々消極的傾向に変化しており、特に第6因子の「日本文化的行動様式を異文化の人々に伝える」項目では、大幅消極的傾向に変化したことが注目される。これについては、活動後の討議の中で話題となっていたが、「異文化の人々に対して自文化を伝える」ことは、「マジョリティへ文化への同化(Assimilation)」の意味として捉えたのではないかと推察される。今後のより具体的で適切な認識調査内容の検討が必要であると考えられる。

(2) 自由記述からの学びの分析

次は、学生各自の活動レポートから抜粋して、学びについて分析したい。

- ・言葉の違いの中でも、積極的に声をかけることを目標としていた。でも会った瞬間からフレンドリーに挨拶をしてくれて、とても楽しい時間を過ごした。そして、英語等を使ってコミュニケーションを楽しんだ。このように、交流ができたことはとても良い体験であった。
- ・3日間で、たくさんの発見と刺激を受け、多文化保育を学んできて良かったと改めて思った。今回学んできたことを保育に生かせるようにこれからも勉強したいと思った。
- ・今回の活動を通して、3点のことに気づいた。第一は、言葉が通じなくても分かり合おうという気持ちや伝えたいという思いで一所懸命にコミュニケーションをとることに努力すれば、関係を築くことができること、第三に、日本と韓国の保育は異なる点も多いが、子どもの心の成長のための支援することを大切にすることは共通していることである。

・今回の多文化体験活動を通して、日本でも多文化家庭の支援センターを作るべきだと思ったし、韓国の文化を知る中で、様々な文化があることを実感できた。この体験ができ、多くの学びが得ることができ、活動に参加できて良かったと思う。

以上のように、本活動に参加した学生の活動レポートからは、多くの学びや気づきが見られた。特に、日韓学生が協働的に行ったフィールドワークを通しての学びの成果が多く見られた。学生たちは事前学習の中で、本活動における目的を理解し、自己課題を明確に設定して、活動に自ら主体的に取り組み、その学びの成果を得たと考える。

7. おわりに

本活動に参加した日韓の学生は、言葉の違いを超えて、本活動のために一所懸命に準備し、積極的にかかわり、何よりも日韓学生の協働活動としてのフィールドワークは学生間の関係をより深いものにし、本活動が目的とした成果を得たと考える。互いの心の優しさに触れ、各々が感動した内容が、多く書かれているように、日韓の学生どちらも、多文化体験活動を通して、互いの文化を理解・尊重し、多様性について学習することができたと言えるだろう。また、日韓の保育文化を学び合うことができ、今日の多様化する社会における保育者としての専門性を修得できる体験活動になったと考える。

そして、本活動を振り返り、改善点及び今後の課題は、次の2点である。一つは、活動場所への移動における安全の確保の側面である。今回は日韓学生が、1対1のペアを組み18名が、電車を利用して協働フィールドワークを行った。大人数のため、より安全を確保した上での移動が必要であると考えた。もう一つは、学びの成果の分析の一つとして用いた認識調査の内容の改善である。先行研究を踏まえることはもちろん、より有効な学びの分析ができる認識尺度が必要である。つまり、国外における体験活動をどのような内容にすればよいのか、その学習成果を可視化できるようにするにはどのように評価するかという課題である。

「体験学習は『種』であり、そこからどうやって果実を实らせていくかが重要だとすると、効果的な振り返り活動を長期的に行っていく手法を模索することは、多文化体験学習に取り組む教育者の重要課題」²⁾である。今後、多文化体験活動において学習者の気づきやより深い内省の促しができるような活動内容及び学習を可視化できる手法のプログラム開発研究を課題としたい。

謝辞：本活動は、2018年度「教育の活性化学長奨励金」助成より行うことができました。その報告を兼ねて執筆したものであります。心より御礼申し上げます。

参考文献

- ・多文化共生キーワード事典編集委員会編（2004）『多文化共生キーワード事典』明石書店
- ・大嶋恭二・岡本富郎・倉戸直実・松本峰雄・三神敬子編（2018）『保育者のための教育と福祉の事典』建帛社
- ・松尾知明（2011）『多文化共生のためのテキストブック』明石書店

-
- 1) 村田晶子編著（2018）『多文化体験学習への挑戦—国内と海外を結ぶ体験的なナビの可視化を支援する』ナカニシヤ出版、5頁。
 - 2) 前掲書、はじめに ix 頁。